

陳舜臣さんを語る会通信

NO.54

Dec. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年12月1日

1966年下期、第56回直木賞候補にノミネートされた『炎に絵を』

本号では、『炎に絵を』を取り上げました。初出は、『オール讀物』1966年5月号～8月号です。

陳舜臣さんが直木賞を受賞したのは、1968年の下期、第60回でしたが、『炎に絵を』は、その2年前、1966年の下期、第56回の候補にノミネートされています。

出版芸術社『炎に絵を』の巻末、「『炎に絵を』の時代」に陳さんの興味深い文章が載っています。

下に抜粋引用いたしました。

右は、1993年6月2日付毎日新聞に載った新刊紹介記事です。→

(編集委員 橘雄三)

炎に絵を

ミステリ名作館

陳舜臣著

商事会社の神戸支店に勤める葉村省吾は兄からある調査を頼まれた。彼らの父親は、中国の清朝が倒れた辛亥(しんがい)革命のとき、革命資金を拐帯したとされるが、その汚名を晴らせという。

先のない病床の兄の頼みだけに省吾は調査を開始した。進むにつれ怪しい影が出没する。命さえ狙われながら、二転三転、ようやく突き止めた驚くべき真相とは？

港町を舞台に展開するナゾまたナゾ、同姓のカラクリに操られる本格推理——著者が乱歩賞、協会賞、直木賞など推理畑の出身だったことを改めて想起する名作だ。

(出版芸術社・1500円)



出版芸術社版表紙

小見出しは編集委員の加筆

『炎に絵を』は一般小説誌最初の連載

この作品は『オール讀物』に昭和四十年五月号から八月号まで連載したものである。当時、ミステリー専門の『宝石』という雑誌があり、私はそれに連載したことはあるが、檜舞台ともいいうべき一般小説誌での連載はこれがはじめてであった。四十二歳の私は、初登板の投手のようになり、丹念にメモをつくり、はやる心を抑えながら書きはじめたことをおぼえている。

『炎に絵を』『阿片戦争』は同時執筆

私はすでに小説『阿片戦争』を書きはじめていた。二千八百枚に及ぶ長編の書き下ろしで、私にとって最も忘れ難い仕事であったが、それと平行して書いたミステリーの『炎に絵を』も、作者として深い愛着をかんじる作品である。

アジアの近現代史を書くために作家に

私は物書きになる前から、アジアの近現代史に関心をもち、いろいろと資料を集めていた。書くテーマはおのずからその方面にしばられる傾向があった。言いかえると、アジアの近現代史を書くために作家になったようなものである。

アヘン戦争に取組んでいたため、私の思考回路は、日中戦争よりややさかのぼった時代に合わされていたようだ。『炎に絵を』も、辛亥革命(一九一一)を背景にしてストーリーが進展する。

分類が嫌い、分類できないものが理想

評論家は私の仕事を、歴史とミステリーの二つの流れをもつと解説しているようだ。私にしてみれば、両者をあまりはつきりと分類したくない気持ちがある。それよりも、アヘン戦争以後の近現代と、それ以前の時代を扱ったものの、という分け方のほうが納得できる。

一方で、私は家業であった貿易にもこだわりをもち、『炎に絵を』の背景にも、貿易や家業がからんでいて、作者としては謎解きだけのミステリーではないつもりであった。

そのころ、松本清張氏の出現で、「社会派」ミステリーということが、しきりに叫ばれていた。それにたいするものが、「本格派」で、私などは後者に分類されがちであった。どうも私は分類がきらいである。分類できないものが理想ではないか、という気持ちで私にあって、『炎に絵を』を書いたころも、そんなことを強く意識していた。一種の挑戦であったといえる。

直木賞候補にノミネート

挑戦が成功したかどうか、作者にはわからないが、ミステリー・マニアにも案外好評であったらしい。またこの作品は第五十六回の直木賞候補にノミネートされたから、ミステリーとしてのひろがりも評価されたのであろう。

一九九三年四月 六甲山房にて 陳舜臣

『炎に絵を』登場人物 & 内容紹介ほか

主な登場人物紹介 最後、一部、違ってきます

●葉村省吾 主人公。化学薬品を製造販売するサクラ商事の社員。このたび、神戸支店に転勤。太平洋戦争勃発直前に、六歳で南方から引き揚げ

●葉村一郎 一九一八年生まれ。省吾の異母兄。私大で経済史を教えているが、ここ七年あまり、療養生活

●葉村伸子 一郎の妻、四十歳になる中学の教師

●葉村順子 一郎・伸子の娘、高校一年生

●葉村鼎造 号は康風。一八八五年生まれ。一九四四年、省吾が九歳の時、死亡。南方で事業をしていた。二度結婚。一郎の母は、一郎が中学二年の時、死亡。省吾の母は省吾を産んで間もなく死亡。■清朝末期、日本へ亡命中の革命家たちが調達した資金を横領、それをもって南方へ逃げたとされている

●呉練海 中国から日本へ、革命資金を受け取りにやって来た革命家。花隈の芸者を妻にしたとの噂がある

●岡本庸助 サクラ商事神戸支店長

●服部三絵子 サクラ商事事務員。花隈育ち。母は花隈の芸者。母が残したアパートを経営している

●春名甚吉 サクラ商事の顧問会計士

●山本国彦 k 大学文学部助教授、郷土史を研究

●汪志昇 汪氏の父は神戸華僑の大立者だった。空襲を免れ、多くの古文書を所蔵

●あかね小母さん 花隈の昔を知る。六五歳

●おはる婆さん 花隈の昔を知る。七〇歳を越している

●橋詰練太郎 帰化した中国人。京都の豪邸の主人。既に死去

●橋詰諏訪子 練太郎夫人。日本人

●植原夫婦 橋詰邸の管理夫婦



集英社文庫版表紙

『炎に絵を』あらすじ並びに補足

ストーリーは、主人公・葉村省吾が、余命少ない兄から、「父は、辛亥革命の際に革命資金を拐帯したとされているが、その汚名をはらしてほしい」という依頼をうけ、調査を開始するところから始まります。

読者は、主人公が「父の汚名を晴らす」べく、調査を重ね真実に辿り着く、という筋を思い描いて読み進みますが、大宮虎城著『邯鄲の夢』の記述や、華僑の蔵の古文書の中から見つかったガリ版刷りの「当世花隈おんな気質」から、まだ、半分も読み進んでいないのに、革命資金拐帯の真相が見えてきます。「えっ、もう解決？」と首をかしげていると、ストーリーは、二転三転。驚きの真相に辿り着きます。題の「炎に絵を」は、共犯者を救おうとする、一種のダイニング・メッセージです。

『邯鄲の夢』■陳舜臣さんは、作中、

「著者の大宮虎城は、孫文たちのシンパで、当時の思い出をかいいたのが、『邯鄲の夢です』と記述しています。これはもちろんフィクションで、宮崎滔天著『三十三年の夢』をヒントにしていることは明らかです。宮崎滔天の本名は虎蔵(寅蔵とも)です。といっても、もちろん、『三十三年の夢』と同じ記述があるわけではありません。ただ、革命資金の「拐帯」、あるいはそれに類することはいくつも例があるようです。孫文自身、似たような疑いで批難追及を受けています。



宮崎滔天 岩波文庫『三十三年の夢』より

ネットで拾った『炎に絵を』の感想文

感想文1 ■亡き父の横領事件の汚名を晴らすべく神戸で真相を探る…という話なわけだけれども、あまりにトントン拍子すぎる前半の調査行はどう考えても「都合主義で、これが名作と言われているからにはたぶんそういうことだよなあ、と思っただけ」くらいだった。真犯人も当時なら衝撃的だったのかもしれないけども…今の時代、驚くには値しなくなってしまう作品だけれども、全編を通して××テーマを重ね合わせる趣向や××を×××××に見せかけるあたりはよくできてるなあと感じはする。

感想文2 ■著者の本はあまりミステリーミステリーしていないのでそういうのを読みなれていない人でも気軽に読めるという「魅力」を感じます。ただし、ミステリーマニアの人には到底受け入れられないという欠点を持っている本でもあります。基本的な展開としては、とんでもない事実が最後に露呈することとなります。読者にとってそれは「あまりに酷」と感じる結末です。

『オール讀物』に、はやる心を抑えながら書きはじめた『炎に絵を』

「炎に絵を」は『オール讀物』に1966年5月号から8月号まで、4回にわたって連載されました。単行本『炎に絵を』で、I章～IV章になっているのも、もとの掲載誌の単位、月毎に一つの章ということです。

これも古本屋で見つけました。定価140円、購入価格2200円。

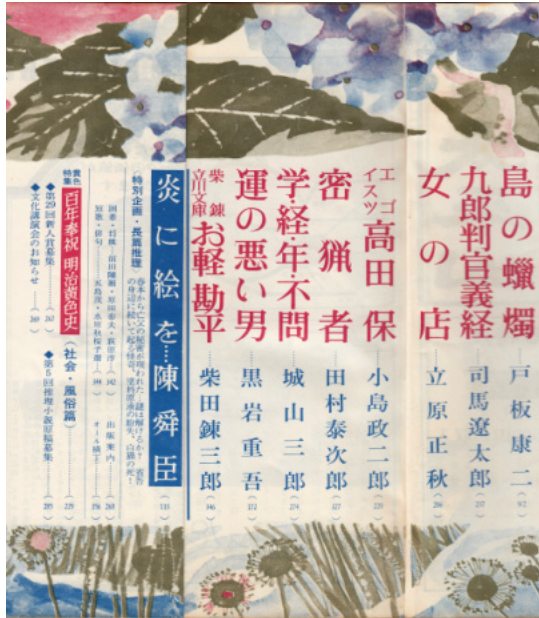
(編集委員 橘雄三)

同号、「炎に絵を」第2回、連載頁



挿画は下高原健二。花隈のあかねの家。昔を語る、あかね小母さん(手前)とおはる婆さん。

同号の目次

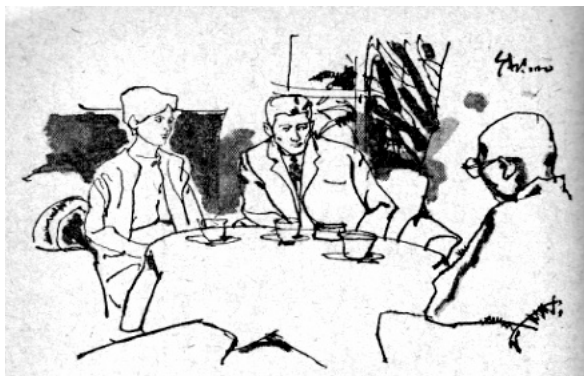


陳舜臣のほか、目次に名を連ねる、司馬遼太郎、立原正秋、小島政二郎、田村泰次郎、城山三郎、黒岩重吾、柴田錬三郎の錚々たるメンバー

「炎に絵を」連載第二回が掲載された『オール讀物』昭和41年6月号の表紙



下高原健二挿画



神戸財界の長老、為津莊吉を訪問した葉村省吾と服部三絵子

歌舞伎はきらいです！
かたく
若い頃の陳舜臣さん、結構、頑な

『炎に絵を』の記述

家柄などというのは、現代では一片のナンセンスではないか。ある歌舞伎役者が、子どもまで産ませ、実質的には妻であった女性を、家柄がちがうというので、ながいあいだ入籍させなかった話がある。アナクロニズムもいところだ。人間性への冒涇(ぼうこう)といってもよい。歌舞伎役者だって、むかしは河原乞食とさげすまれ、なみの人間以下に扱われていたではないか。なにが家柄だ！

何も、歌舞伎の世界を持ち出さなくてもよいところにこの話を置いていきます。(出版芸術社版『炎に絵を』 p.107)

■また、『寶石』昭和38年9月号、「ある作家の周囲―陳舜臣篇」(p.105)で、演劇について次のように話しています。

観るのは好き。ただし、歌舞伎はきらいです。世襲制度のわざと反感をもちます。人間として、自分の意思で選んだ仕事にうちこむことが貴いのです。世襲は、どんなに美しくても、人間的ではない。

後年、「寛容大度」と言われた陳舜臣さんですが、『炎に絵を』での記述といい、『寶石』のインタビューでの答えといい、若かりし時代の陳さんは、なかなか頑なです。

歌舞伎



陳舜臣さん、直木賞受賞祝賀会の写真(於:灯籠茶屋)見つかる!

神戸武夷登山会機関紙『三十週年紀念刊』(1969年5月 発行)に掲載された、陳舜臣さんの文章並びに同年2月撮影の写真「直木賞受賞祝賀会 於:再度山灯籠茶屋前」を紹介いたします。(編集委員 橘雄三)

武夷登山会三十周年を祝う

い
爰

は活字にないので、文中、「夷」で代えさせていただきました。(編集委員)

江戸川乱歩賞 受賞作家 陳 舜 臣
直 木 賞

旧暦9月9日、重陽の節句には、むかし中国では一家そろって『登高』する習慣があった。それほど高い山に登るのではないらしいが、そこで野宴をひらき、菊花を酒にうかべる。そのとき紅い茱萸を髪にさして、厄払いをしたといわれている。ごく近年までこの風習は残っていたはずだ。

一家そろって登山するので、一人でも欠けていると、その人のことが思い出されるのはどうぜんであろう。

王維の詩に、「遙知兄弟登高處 遍插茱萸少一人」という句がある。旅に出て重陽の節句の日に、遙か故郷をしのんで、兄弟たちはいまごろ例年のように、茱萸の実をかざして山に登っているだろうが、その場には私一人欠けている、かなしいことだ。という意味なのだ。

杜甫にも「重陽独酌盃中酒 抱病起登江上台」とか、「万里悲秋常作客 百年多病独登台」といった重陽の句がある。いずれも旅中の作で、おそらく山に登って故郷を想ったのであろう。

このような風習によるイメージがあるので、中国人にとっては登山ということが、すぐ望郷の念につながる。

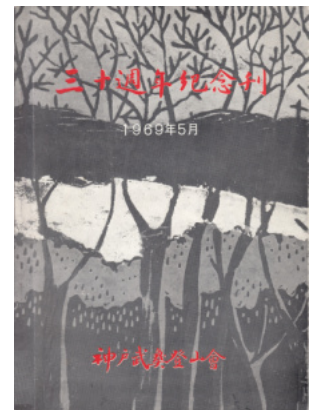
武夷登山会はことしで満30年を迎えた。武夷は中国福建の名山である。名茶の産地であり、大儒朱熹ゆかりの地でもあるが、われわれの先輩がこのよう

な難しい字をわざわざ登山会の名につけたのも、そこに望郷の念がつよくうごいていたのであろう。

東洋では西洋のアルピニストのように、山を征服するという思想はなかった。自然と敵対関係をもつのではなく、むしろ崇拜してきた。中国の五台山や日本の高野山など、いずれも霊地とされてきた。わが再度山も山上近くに大竜寺がある。弘法大師が二度この山に登ったのが『再度山』の名の由来であるときくが、入唐求法の弘法大師は、中国とは縁が深い。その名僧にゆかりのある再度山に、大ぜいの華僑が登っていることは、なにかの象徴のように思える。

30数年まえに武夷登山会が創立されたとき、私はまだ子どもであったが、父に連れられてよくこの山に登った。再度山は私の少年時代の思い出にもつながるが、この山麓に居を移して2年来、ほとんど毎日登るようになった。運動不足解消のためであるが、ただそれだけではない。

この会がますます発展することを、会員の一人として祈願してやまない。



現在の灯籠茶屋
(写真は編集委員)



「作家陳舜臣先生 直木賞受賞祝賀会」
於:再度山灯籠茶屋前 1969.2.2 撮影
前列右から陳徳仁氏、父・陳通氏、ご本人
立っている人、左から3人目、弟・陳仰臣氏